

まとめ
松本 光朗（森林総合研究所）

開催趣旨説明で「刺激的」という言葉を何度も使ったが、まさに私自身がそれを実感する1日だった。最初に Dr. Sanz-Sanchez には REDD+の過去・現在・未来を総括していただいた。一般に COP11 が REDD の始まりだといわれるが、そうではなく、すでに京都議定書の時点から、つまり CDM や Forest Management CDM (FM-CDM) のときから議論していた話題なのだと、長年の経験を披露していただいた。また、REDD+には定まったルールブックがあるわけではなく、長い交渉の一つ一つの段階がルールブックになっているのだということが非常に印象的だった。今後は実施のステージに入っていくが、REDD+の活動は一直線に進むものではなく、段階的なものとおっしゃっていた。経験からもう一度見直して、実践との間で往復することがわれわれには必要だと感じた。

世界銀行の Mr. Lotsch からは、森林炭素パートナーシップ基金 (FCPF) の現状についてお話しいただいた。FCPF については、計画や文書化のステージの話はよく聞いていたが、実際に実施が進んで、既に結果に基づく支払いの段階に来ており、その排出削減量がどう扱われるのか、そこまで具体的な議論になったということは初めて聞いた。非常に印象的な話で、FCPF が REDD+の先駆的な位置付けであるということをつくづく感じた。

午後のセッション1は、参照レベルの話であった。実のところ、参照レベルをテーマに扱うこと自体が極めてマニアックで、どうなるかと心配していた。しかし、期待していたように、あくまで参照レベルを切り口としながらも、その裏にある皆さんの考えや苦労を見事に語っていただいた。その中で、各国の取り組みの進展ぶりに驚いたということを正直に申し上げたい。国内での技術的な進歩や体制構築などを基に、国内での議論を経て参照レベルができてきた過程をあらためて確認した。皆さんに敬意を表したい。

その報告を聞きながら、私はデジャヴのように感じた。10年前、先進国は京都議定書のために各国の森林の吸収量・排出量を算定報告する義務があった。日本でも、先進国の担当者をお台場に集めて議論するなど、われわれもいろいろなことを行っていた。私自身もヨーロッパに呼ばれて日本の方法を報告したことを思い出す。実を言うと、途上国のトッププランナーの皆さん方のレベルは、10年前に先進国が行った算定報告と同水準ではないかと思ったほど、その進歩に感銘を受けた。

セッション2では、スケーリングに関する新しい話題を頂いた。Ms. Swickard からの、VCSで行っている JNR の nesting オプションについての情報提供からは、われわれが行っている JCM と同じ問題意識が見出された。やはり同じようなことを考え、同じ悩みを抱いているのだと思いながら聞いた。

また、鈴木氏は各国で国レベルの体制づくりを行っている。その関係から、国から準国、さらにプライベートセクターまで、縦の情報のやりとりを経験豊かに語っていただいた。鈴木氏のスライドから、日本国内の吸収量算定報告の際の国と県の役割やデータのやりとりといった経験が思い出された。

矢崎氏、天野氏には、今まさに現場で悪戦苦闘されている最新の情報を頂いた。お二人ともプロジェクトを広げることによるスケーリングアップを考えておられたが、恐らくス

ケーリングアップの理想的なあり方だろう。

パネルディスカッションでは、やはり資金に関する話題が取り上げられた。パリ協定が、従来の REDD+に欠けていた資金について提示したと Dr. Sanz-Sanchez から指摘があった。すなわち、資金以外はもう OK ということである。これまでずっと苦勞してきたところは見事に進歩できた、あとは資金、その体制だけだと感じた。

本日は情報交換により、最先端の取り組みをお互いに確認することができたが、これらの取り組みは、非常に豊かな優良事例の蓄積となっている。REDD+のルールは、決まってはいるが柔軟性のある幅広いものなので、具体的な事例は有効だ。このような情報交換は、Dr. Sanz-Sanchez が指摘していたように、”step-wise, not linear”ということで、行ったり来たりの試行錯誤を促進させるともいい機会になったのではないか。このような機会を提供することも森林総合研究所の一つの使命・貢献であると考えている。本日あらためてそのことを認識した。

この国際セミナーは今年で6回目の開催で、毎年あることがもう当たり前のように感じられているのも非常にうれしいところだが、来年もこのような機会をぜひつくりたい。そこで皆さんの着実な進展、さらなる進展を報告していただきたい。それがまたわれわれの進歩を助けるものになると確信している。

本日は長い時間ディスカッションに参加していただき感謝する。誠にインフォマティブな会議だった。皆さんに、それぞれの国、それぞれの部署に帰った後、この情報を有効に使っていただけることを望んでいる。